

令和5年度新潟県病害虫発生予察情報・予報第2号
(5月の発生予想)

令和5年4月28日

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【水稲】

イネドロオイムシ	量：並 時期：やや早い	① 前年の成虫発生量は平年並(±)、幼虫被害は平年比やや少なかった。(±~-) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並が多いと予想されている。(±~+)
イネミズゾウムシ	量：やや少ない 時期：やや早い	① 前年の成虫発生量は平年比やや少なく、成虫による被害は平年並であった。(-~±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(+)

【なし】

黒斑病	量：やや少ない~並 時期：並	① 前年の発生量は平年比やや少なく、越冬菌量も平年比やや少ないと推測される。(-) ② 向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されている。(±~+)
黒星病	量：多い 時期：早い	① 前年の発生量は平年比やや多く、越冬菌量も平年比やや多いと推測される。(+) ② 4月下旬の花葉そうの発病は平年比多い。(+) ③ 向こう1か月の降水量は平年並が多いと予想されている。(±~+)
<p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 花葉そう基部の病斑は葉や果実への伝染源となるため、見つけ次第除去し、園外に持ち出して適切に処分する。</p> <p>② 病落葉からの子のう胞子感染期(4月下旬~5月上旬)は重点防除時期のため、その時期の防除を徹底する。園地周縁部等の薬剤のかかりにくい部分に対しては補正散布を行う。</p> <p>③ 耐性菌の出現を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用を避け、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。</p>		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】つづき

セイヨウナシ 褐色斑点病	量：並 時期：早い	<p>① 前年の発生量は平年比やや少なく、越冬菌量も平年比やや少ないと推測される。（－）</p> <p>② 4月下旬に花葉そうで少発生が認められた。（＋）</p> <p>③ 主要産地では一次伝染源となる病落葉等の処分が取り組まれている。（－）</p> <p>④ 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている。（±～＋）</p> <p>【防除上の留意事項】</p> <p>① 園内をよく観察し、発病葉が認められた場合は速やかに除去し、園外に持ち出して適切に処分する。</p> <p>② 開花初期～大袋かけ前（6月5日）は重点防除時期のため、この時期の防除を徹底する。園地周縁部等の薬剤のかかりにくい部分に対しては補正散布を行う。</p> <p>③ 耐性菌の出現を抑制するため、作用機構の同じ薬剤の連用を避け、作用機構の異なる剤をローテーションで使用する。</p>
ナシヒメシンクイ	量：多い 時期：早い	<p>① 前年のフェロモントラップの総誘殺数は平年並～やや多かった。（±～＋）</p> <p>② フェロモントラップでは、4月第1半旬より誘殺が認められており、発生時期は平年比早い。</p> <p>③ 越冬世代成虫の誘殺数は平年比多い。（＋）</p> <p>④ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）</p> <p>【防除上の留意事項】</p> <p>① フェロモントラップでの越冬世代成虫の誘殺ピークは4月第3半旬頃と推測される。第1世代幼虫の防除時期は、誘殺ピークから12～22日後である。</p> <p>② 発生時期が早まっていることから、防除が遅れないよう留意するとともに近接するもも樹等の防除を徹底する。</p>
ハマキムシ類	量：やや多い 時期：やや早い	<p>① 前年のフェロモントラップの総誘殺数は平年比やや多い～多く、越冬幼虫量も平年比やや多い～多いと推測される。（＋）</p> <p>② 4月下旬の花葉そうの被害は未確認で平年並。（±）</p> <p>③ 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。（＋）</p> <p>【防除上の留意事項】</p> <p>園内をよく観察し、花葉そうに被害がみられる園地では5月上旬までに防除を行う。</p>
アブラムシ類	量：並 時期：早い	<p>① 4月下旬にワタアブラムシの寄生が確認された。（＋）</p> <p>② 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている。（±～－）</p>

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【なし】つづき

クワコナカイガラムシ	量：やや多い 時期：やや早い	① 前年の発生量は平年並であった。(±) ② 向こう1か月の気温は、平年比高いと予想されている。(＋)
【防除上の留意事項】 ① 越冬世代幼虫のふ化時期(50%分散日)は、5月第2半旬で平年比やや早いと推測される。 ② 若齢期ほど防除効果が高いので、防除時期が遅れないよう注意する。		
ニセナシサビダニ	量：やや少ない 時期：やや早い	① 前年の発生量は平年比やや少なかった。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く(＋)、降水量は平年並か多いと予想されている。(±～－)
【防除上の留意事項】 ① 前年にモザイク症葉の発生がみられた園地では、4月下旬～5月上旬にトルフェンピラド水和剤などの防除効果の高い薬剤を散布する。 ② 本種は日本なしだけでなく、ル レクチエにも寄生するので、前年にモザイク症葉の発生がみられた園地では、日本なしと同様の防除対応を行う。		

【もも】

せん孔細菌病	量：並 時期：早い	① 前年秋期の発生量は平年比やや少なく、越冬菌量もやや少ないと推測される。(－) ② 春型枝病斑の発生が各産地で認められる。(＋) ③ 向こう1か月の降水量は平年並か多いと予想されている。(±～＋)
【防除上の留意事項】 ① 春型枝病斑は、新梢葉や果実への伝染源となるため、ほ場内をよく観察し、疑わしい枝も含め徹底してせん除する。また、せん除した枝病斑は、園外に持ち出し適切に処分する。 ② 病原菌は葉や果実の自然開口部(気孔等)や傷口から侵入するので、風当たりの強い園地では防風ネット等の防風対策を徹底する。 ③ 薬剤防除は多発生してからでは効果が劣るため、早めの予防散布を心がける。重点防除時期は4月中旬～6月中旬である。		
モモハモグリガ	量：やや少ない 時期：並	① 前年のフェロモントラップの総誘殺数は平年比やや少なく、越冬成虫量も平年比やや少ないと推測される。(－) ② 4月25日現在、フェロモントラップでの越冬世代成虫の誘誘は認められていない。(－) ③ 向こう1か月の気温は、平年比高いと予想されている。(＋)
【防除上の留意事項】 越冬世代成虫の飛来は、1月16日を起点に200日度(发育低温限界4.5℃)に達した日は平年並の4月第4～5半旬頃と推測されることから、5月上旬に防除を行う。		

【作物名】 病害虫名	予報内容 発生量：平年比 発生程度： 発生時期：平年比	予報の根拠
---------------	--------------------------------------	-------

【冬春トマト（施設）】

灰色かび病	量：並 程度：少発生 (果実発病度1~20)	① 4月下旬の果実発病は少発生で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多いと予想されている。(＋)
コナジラミ類	量：やや少ない 程度：少発生 (寄生株率1~25%)	① 4月下旬の発生量は少発生で近年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多いと予想されている。(＋)
アザミウマ類	量：並 程度：少発生 (寄生花率1~10%)	① 4月下旬の花への寄生や被害果(白ぶくれ症果)は未確認で、平年並からやや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

【冬春いちご（施設）】

うどんこ病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病果率1~5%)	① 4月下旬の果実発病は未確認で平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多いと予想されている。(±)
灰色かび病	量：やや少ない 程度：少発生 (発病果率1~5%)	① 4月下旬の果実発病は未確認で平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多いと予想されている。(±)
アブラムシ類	量：並 程度：少発生 (寄生株率1~25%)	① 4月下旬の寄生は少発生で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多いと予想されている。(＋)
コナジラミ類	量：やや少ない 程度：少発生 (寄生葉率1~25%)	① 4月下旬の寄生は少発生で平年比やや少ない。(－) ② 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は平年並か多いと予想されている。(＋)
アザミウマ類	量：並 程度：少発生 (寄生花率1~2%、 被害果率1~5%)	① 4月下旬の被害は未確認で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)
ハダニ類	量：並 程度：中発生 (1葉当たり 寄生虫数1~2、 寄生株率1~40%)	① 4月下旬の寄生は少発生で平年並。(±) ② 向こう1か月の気温は平年比高いと予想されている。(＋)

～ 防除上の注意事項は、最新の「新潟県農作物病害虫雑草防除指針」を参照してください ～

注1：①「予報内容」の発生量は、予想される発生量が、新潟県における平年の発生量に比べて多
いか少ないかを、少、やや少、並、やや多、多の5段階で表記しています。

②発生程度は、予想される発生量が、国の調査実施基準等で定められている、無発生、少発
生、中発生、多発生、甚発生のいずれに該当するかを表記しています。

注2：「予報の根拠」の、（+）は発生量を増加させる要因、（-）は発生量を減少させる要因、
（±）はどちらともいえない要因を示しています。

～ 農薬は適正に使用しましょう ～

- 農薬の準備・使用にあたっては、必ず最新の農薬登録情報を確認しましょう。
- 使用に際しては、ラベルに記載の使用基準や注意事項をよく読み、使用者が責任を持って使
きましょう。
- 農薬の飛散防止に努めましょう。周辺作物や住宅及びミツバチ等への危害防止のため、周辺の
生産者や住民、養蜂業者に事前に防除計画を通知するなどの対策をとりましょう。
- 農薬の使用後は防除日誌や作業日誌等の記帳に努めましょう。
- 水田で湛水して農薬を散布する場合は、処理後7日間の止水を厳守し、落水しないようにしま
しょう。

新潟県病害虫防除所業務課

電 話：0258-35-0867

F A X：0258-35-7445

<https://www.pref.niigata.lg.jp/sec/bojo/>

【参考】北陸地方 1か月予報（4月29日から5月28日までの天候見通し）

（新潟地方气象台：令和5年4月27日発表）

＜予想される向こう1か月の天候＞

暖かい空気が流れ込みやすいため、向こう1か月の平均気温は高く、特に、期間の前半はかなり高くなる可能性があります。

期間の前半を中心に、気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並か多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、高い確率60%です

週別の気温は、1週目は、高い確率70%です。

2週目は、高い確率60%です。

3～4週目は、ほぼ平年並の確率40%です。

＜向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（%）＞

	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10	30	60
降 水 量	20	40	40
日照時間	40	30	30

＜気温経過の各階級の確率（%）＞

	低い	平年並	高い
1週目（4月29日～5月5日）	10	20	70
2週目（5月6日～5月12日）	10	30	60
3～4週目（5月 13日～5月26日）	30	40	30